2015年8月26日　13:00～17:30

教育改善のためのＩＲ活用

中井俊樹・清水栄子
（愛媛大学）

愛媛大学

到達目標

- ＩＲ の実践の標準的なプロセスと課題を自分の言葉で説明できる。
- 教育改善のためのＩＲ活用の実践事例を通して、ＩＲの実践の工夫を説明できる。
- ＩＲ の知識と技能を所属大学の教育改善の具体的事例に適用することができる。
- ＩＲに関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気に貢献することができる。

構成

- ＩＲとは何か
- ＩＲの実践の指針
- 実践のプロセス
- 実践事例から学ぶ
- 質疑応答

課題　中途退学への対策３

- 方策を考える上で１回目の議論と２回目の議論ではどのような違いがありましたか。
- 方策を考える上で、図１以外にどのような情報をＩＲ部門に提供を依頼しますか。
- ２つの議論の結果をグループのワークシートに記してください。

データ活用の有効性

昨今の経済状況を見る限り、経済的理由で中途退学していると思う。経済的支援を検討すべきではないか

調査によると、本学では中途退学者の中で経済的理由で退学する割合は5%程度です。学習意欲の低下と人間関係の悩みだけで原因の8割を占めるので、まずはその対策から始めませんか

- 現状を正しく把握し、適切な意思決定を行うことができる
- 周囲に対して説得力を増し、組織での合意を得やすくなる

ＩＲとは

- Institutional Research

「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われる調査研究」（Saupe、1990）

  - データ提供ではなく情報提供
  - 学問志向の研究というよりも実践志向の強い調査研究

アメリカのIRの業務

	通常業務	臨時業務
学内業務	・在学者管理の分析 ・Cohort（入学年次別）分析 ・Retention（継続在籍率）分析 ・卒業率に係る分析 ・履修コースの設定及び登録状況 ・学生の満足度調査 ・学内調査の設計・実施	・学習成果の測定・分析 ・財務分析及び収支予測 ・教員の配置及び給与に係る分析 ・戦略（事業）計画 ・教育プログラム（コース）の評価 ・外部評価 ・内部コンサルティング ・ベンチマーク
外部への説明責任	・学生納付金に係る情報収集・分析 ・大学年鑑 ・主要業績評価指標 ・クラスサイズ分析 ・機関報告書 ・認証評価報告書 ・連邦の高等教育機関情報 ・NFS データ収集	・補助金団体への報告書 ・大学ランキング・データ ・その他の機関情報

（出典）浅野・本田・嶌田（2012）、日本高等教育学会第 15 回大会、報告資料。

日本におけるＩＲ普及の背景

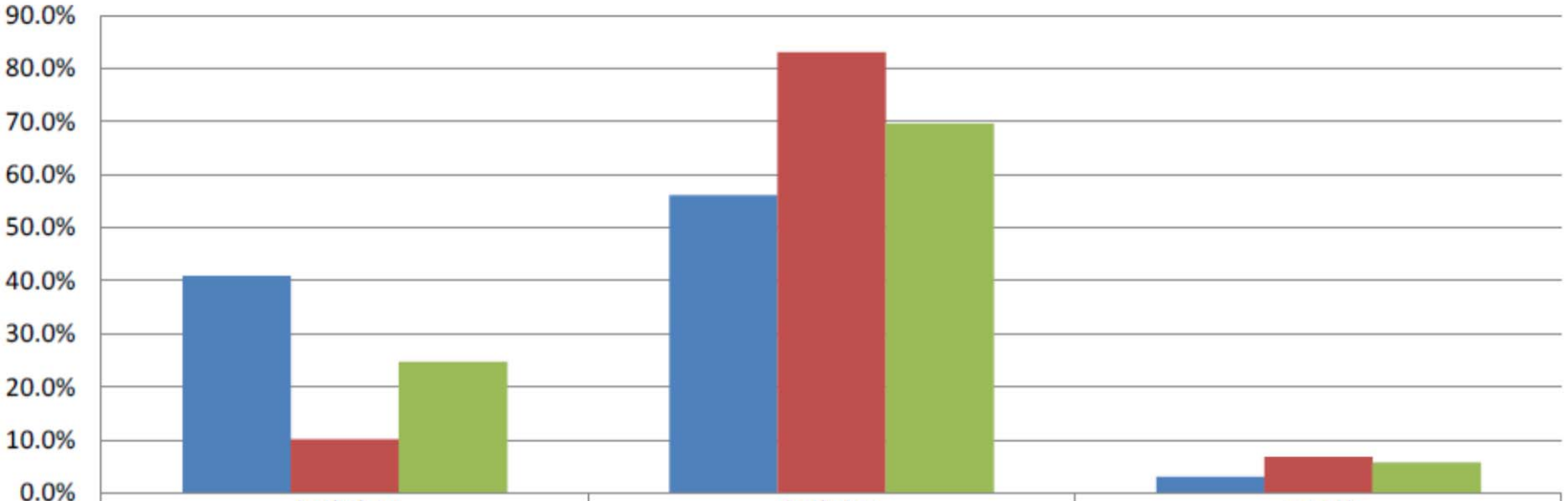
- 認証評価対応，経営改善圧力，教育改善圧力
  （アクレディテーション，大学淘汰への対応，
  リテンション率への注目←1970年代アメリカと類似）
  （沖・岡田2011）
- 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月)
  「2 大学職員の職能開発」

“大学の諸活動に関する調査データを収集・分析し，経営を支援する職員”の重要性が指摘（p.41）

日本では多様な実践事例

- 期待される役割による３つの形態
  - 外部評価への対応業務を重視したIR
  - 経営活動の改善を重視したIR
  - 教育活動の改善を重視したIR
- 多様化している他の要因
  - 全学的なIR部門か各部局で分散するか
  - 官僚的な組織か同僚的な組織か
  - 教員が担当するか、職員が担当するか
  - その時々の執行部の特徴やニーズ

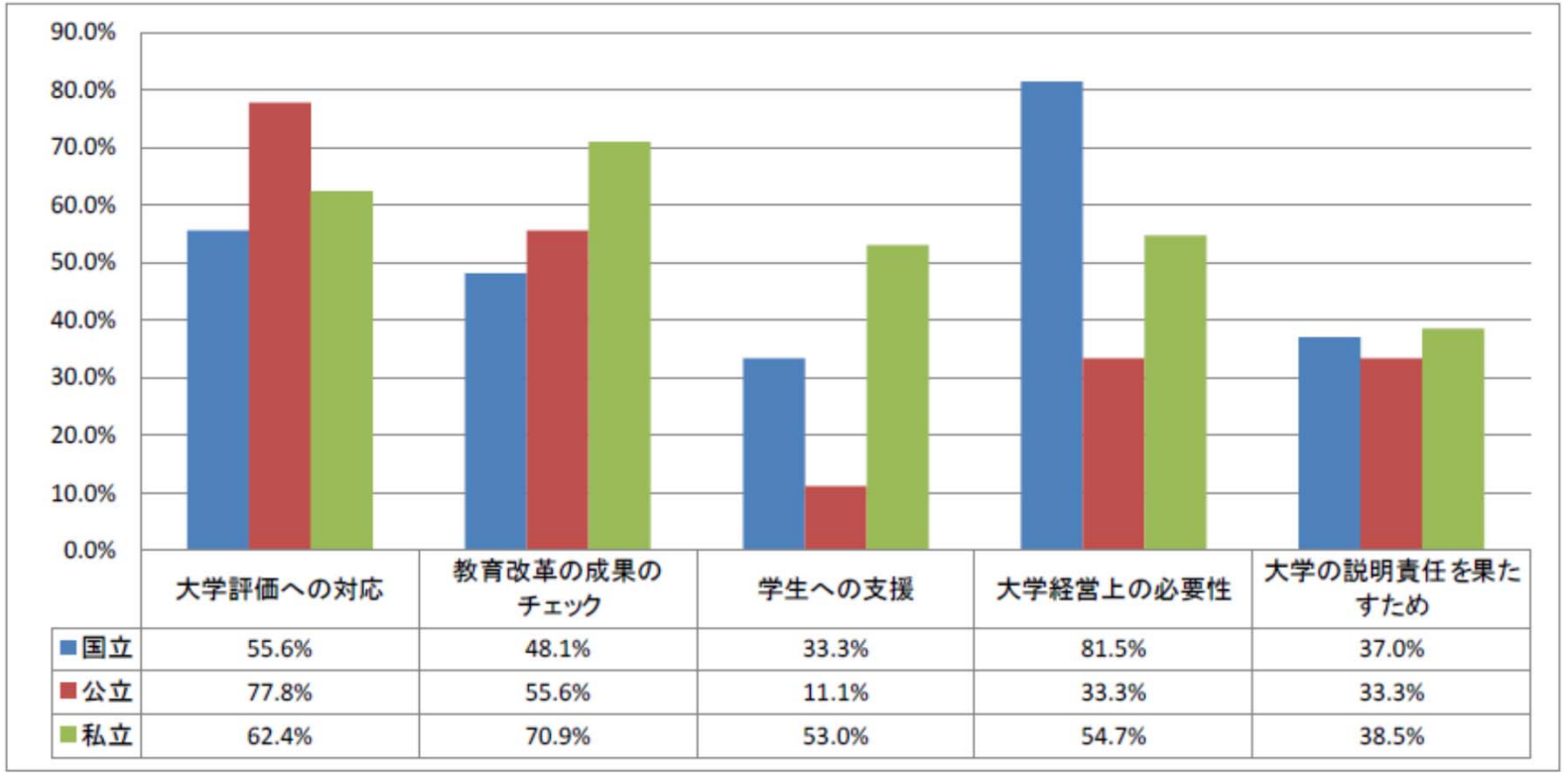
Ｉ Ｒ組織の設置状況



	組織有り	組織なし	その他
国立	40.9%	56.1%	3.0%
公立	10.2%	83.1%	6.8%
私立	24.7%	69.5%	5.8%

東京大学（2014）

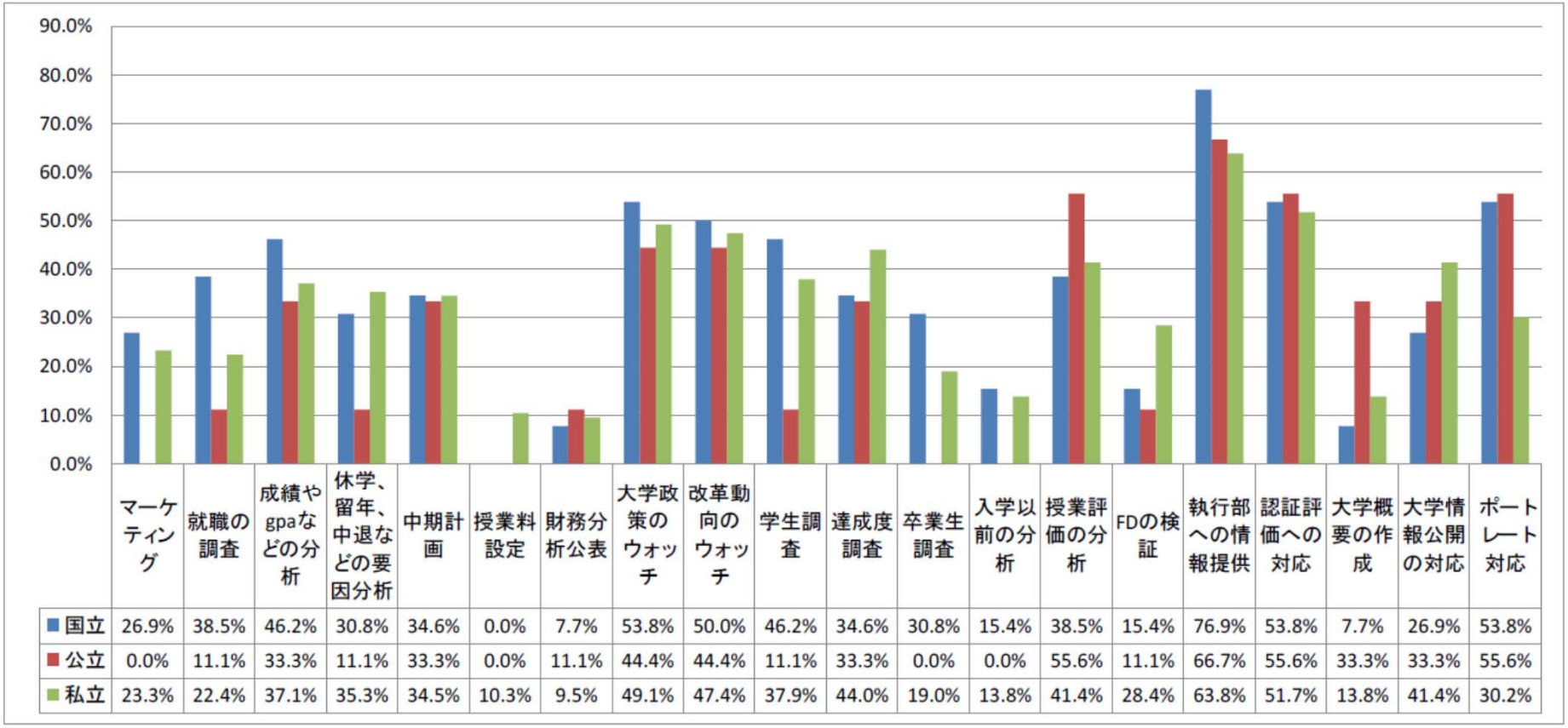
Ｉ Ｒ組織の設置目的



	大学評価への対応	教育改革の成果のチェック	学生への支援	大学経営上の必要性	大学の説明責任を果たすため
国立	55.6%	48.1%	33.3%	81.5%	37.0%
公立	77.8%	55.6%	11.1%	33.3%	33.3%
私立	62.4%	70.9%	53.0%	54.7%	38.5%

東京大学（2014）

ＩＲ組織の担当業務



	マーケティング	就職の調査	成績やgpaなどの分析	休学、留年、中退などの要因分析	中期計画	授業料設定	財務分析公表	大学政策のウォッチ	改革動向のウォッチ	学生調査	達成度調査	卒業生調査	入学以前の分析	授業評価の分析	FDの検証	執行部への情報提供	認証評価への対応	大学概要の作成	大学情報公開の対応	ポートレート対応
国立	26.9%	38.5%	46.2%	30.8%	34.6%	0.0%	7.7%	53.8%	50.0%	46.2%	34.6%	30.8%	15.4%	38.5%	15.4%	76.9%	53.8%	7.7%	26.9%	53.8%
公立	0.0%	11.1%	33.3%	11.1%	33.3%	0.0%	11.1%	44.4%	44.4%	11.1%	33.3%	0.0%	0.0%	55.6%	11.1%	66.7%	55.6%	33.3%	33.3%	55.6%
私立	23.3%	22.4%	37.1%	35.3%	34.5%	10.3%	9.5%	49.1%	47.4%	37.9%	44.0%	19.0%	13.8%	41.4%	28.4%	63.8%	51.7%	13.8%	41.4%	30.2%

東京大学（2014）

ＩＲ実践のための７つの指針

- 大学の目標達成に資する活動を進める
- データを意味のある情報に変換する
- データに基づく判断の有効性と限界を理解する
- 客観性と中立性を重視する
- 調査と公表においては倫理面に配慮する
- 学内外の多様な関係者と連携を進める
- 専門性を高める機会をつくる

＜指針１＞大学の目標達成に資する活動

- ＩＲの“Ｉ”は，機関（Institutional）
- ミッションに基づく調査研究
- 大学の現状と課題についての理解
- とりうる意思決定や組織の論理の理解
- ただし、受動的な業務という意味ではなく、
  自らが課題を発見していく積極的な姿勢が重要

＜指針２＞データから情報への変換

- データはある事実を表した無機質なもの
- データを意味ある情報に変換するのが、IRの本質であり醍醐味
- その変換に求められるもの
  - 問題意識
  - 仮説
  - 基準
  - 分析手法

＜指針３＞データに基づく判断の有効性と限界

■ 有効性
- 現状を正しく把握し、適切な意思決定を行うことができる
- 周囲に対して説得力を増し，組織での合意を得やすくなる

■ 限界
- 大学は成果を測定しにくい、数字がすべてを表さない
-「・・・である」から「・・・すべき」へは論理的飛躍（ヒュームの法則）
- 伝統的価値観との葛藤が生じる

＜指針４＞客観性と中立性の重視

- 意思決定は個々の構成員の利害に影響を与える
- 求められるのは、客観性と中立性
- 一部の構成員にとって都合がよくなるようにデータを解釈したり、不都合な情報を隠したりしない
- そのような行為は，大学のためにならないだけでなく、ＩＲに対する信頼をも低下

＜指針５＞調査における倫理面の配慮

- IRに携わる者としての責任と自覚
- 調査の対象者、協力者、大学組織などに対して倫理的に適切な行動
  - 法令や規則の順守
  - 調査対象者などの安全や人権の尊重
  - 調査の過程や成果の公表方法などの事前の説明と同意
  - 個人情報の収集と保護
  - 調査データの管理の徹底
  - 対象者や協力者の負担を極力減少する努力

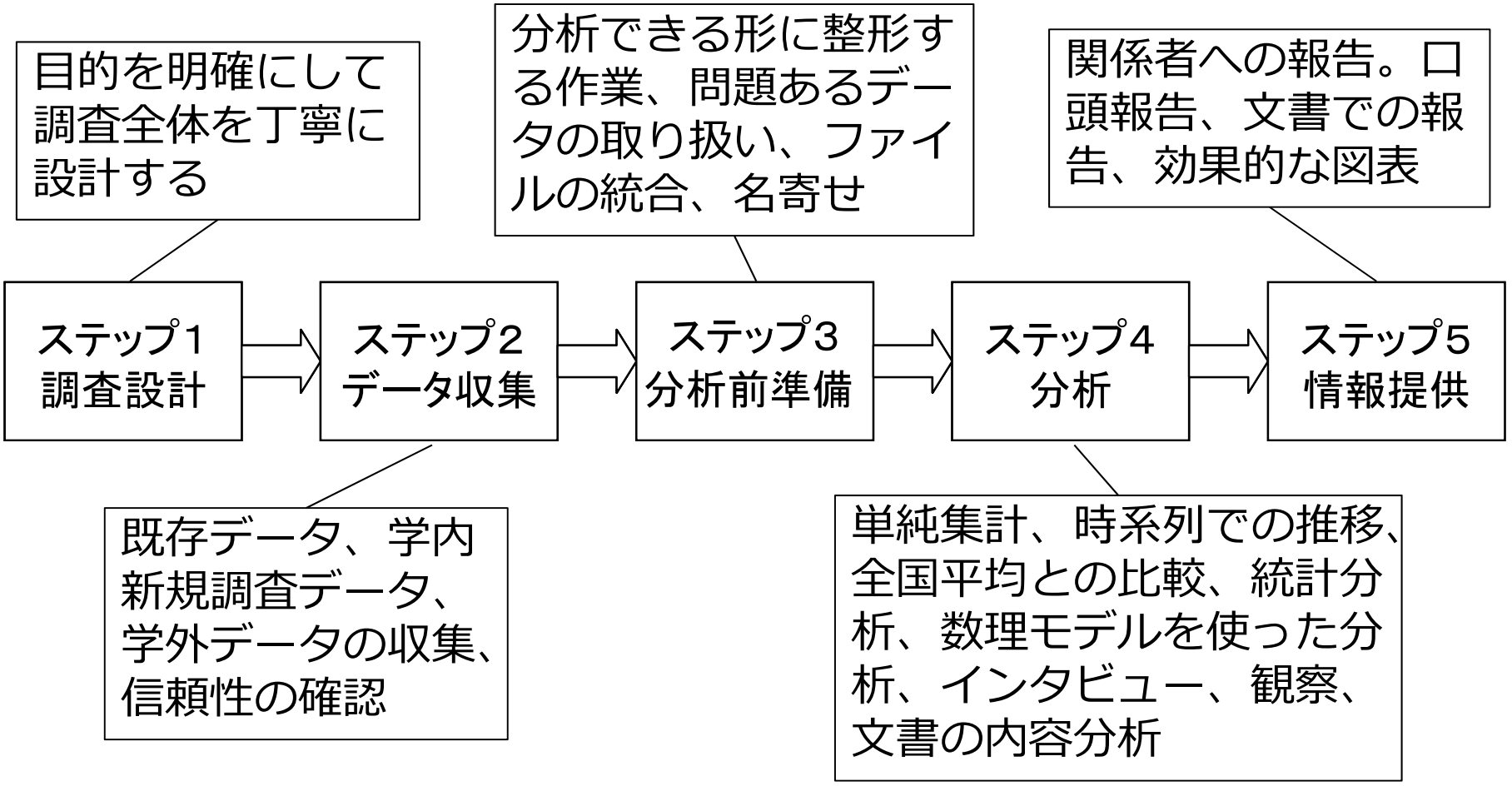
＜指針６＞学内外の多様な関係者の連携

- 学内のどこにどのようなデータがあるのかを把握
- 調査には多くの関係者の協力が必要
  - 調査の回答者として学生や教職員
  - 特殊な分析に関しては学内の研究者に協力
  - 卒業生、高等学校、企業
- IRの活動の意義を広く伝える必要
- IRの業務で協力を得た関係者には、可能な範囲で調査結果を知らせる

＜指針７＞専門性を高める機会

- IRは学際的な分野
  - 教育学、心理学、統計学、情報学、経営学など
- 専門性を高める二つの視点
  - 自分自身の職能開発。近年では職能開発の機会は増加。調査方法については多くの既存書籍あり。
  - IR担当者全体の職能開発。アメリカでは1965年にIRに関する専門職団体が設立され、IRに関わる知識や技能を開発・蓄積・共有。
- 大学によってはデータや分析方法，分析結果を外部に公開できない場合もあるという課題

ＩＲ実践の５つのステップ



分析の基本

- 学生の一日の授業時間外の学習が平均２時間だった場合、その数値が適切な範囲内にあると言えるか？
- データを意味ある情報に転換する基本的な方法の一つは、基準を探すという作業
- 基準の探し方
  - 過去との比較
  - 集団間のデータの比較（男女別、学部別、学年別、入試形態別などの大学内の比較、他大学や全国平均との比較）
  - 法規や外部機関が定めている基準との比較
  - 大学自身が設定する内的基準との比較

意思決定に資する情報の例１

- 時系列での比較「以前よりも悪化しているので改善しよう」
- 他の組織との比較「全国平均より数値が低いから対策を練ろう」
- 法規との関係「設置基準で求められている時間を参考に、学修時間を増やそう」
- 目標との関係「大学の目標として主体的学習を推進しているので、時間外学習を促進する方策を考えよう」
- 因果関係「寮の学生の方が学習成果が高いので、寮の規模を大きくしよう」
- 課題の明確化「どうも科目Ａで学生はつまづいているようだ。科目Ａを中心にカリキュラムの見直しをしよう」

意思決定に資する情報の例２

- 長所を伸ばす「ウチの強みはＡなので、Ａに力を入れよう」
- 短所をなくす「ウチの弱みはＢなので、Ｂに力を入れて立て直そう」
- 費用対効果「同じ効果が期待できるので、一番安い方法Ａを採用しよう」
- 費用便益「投資した金額は2年で回収できるので進めよう」
- 学生などのニーズ「○○の分野の学習を希望する学生が増えているので、カリキュラムで反映しよう」
- 労働市場のニーズ「○○の分野の労働者が必要になってきているので、カリキュラムで反映しよう」

実践事例から学ぶ

- 個々の教員の授業改善に資する学内データの提供の事例

- 学習成果の可視化による改革の事例

データの共有による授業改善

- 授業改善に資する学内データをどのように共有するかという課題とその解決方法を事例にそって考えます。
- 背景
  - 学内にはすでにさまざまなデータがある（教務データ、入試データ、各種調査によるデータ・・・）
  - しかし、十分に活用されているとは言えない。

課題　新任教員へのデータ提供

- 新任教員が授業を設計する上で役立つと考えられる学内にあるデータを提供することになりました。どのようなデータを提供しますか。
- 役立ちそうな学内データのベスト１０をグループで作成してください。
- データは、新入生アンケートといった調査名や報告書ではなく、「第一志望の入学者の比率」といった具体的なものとして考えてください。

課題　データ提供の内容と方法

- 愛媛大学のポスターのすぐれている点と改善したほうがよい点をそれぞれまとめてください。
- 次年度に再度ポスターを作成するならどのように改善しますか。

学習成果の可視化による改革

- 学習成果の可視化による改革における課題とその解決方法を事例にそって考えます。
- 背景
  - 学習目標の明示化が進む（ディプロマポリシー、社会人基礎力、汎用的能力・・・）
  - 学習成果の評価が進む（質保証、ＩＲ、学生調査、アセスメントポリシー、ルーブリック、ポートフォリオ・・・）

愛大学生コンピテンシー（2012）

5つの能力	12の具体的な力
Ⅰ．知識や技能を適切に運用する能力	１．必要な情報を収集・整理できる ２．個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる ３．習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる
Ⅱ．論理的に思考し判断する能力	４．広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる （例：クリティカル・シンキング／創造的思考） ５．科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる （例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力）
Ⅲ．多様な人とコミュニケーションする能力	６．様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる （例：ダイアローグ／ディスカッション／プレゼンテーション） ７．目的達成のために多様な人と協働できる （例：協調性／チームワーク／リーダーシップ）
Ⅳ．自立した個人として生きていく能力	８．自らの個性や適性を活かして行動できる （例：自己理解／自己決断／リフレクション） ９．社会的関係の中で自分の行動を調整できる （例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守）
Ⅴ．組織や社会の一員として生きていく能力	１０．他者を理解し、他者のために役立つことができる （例：「お接待」の心／ホスピタリティ） １１．集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる（例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心） １２．地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる（例：社会貢献／グローカルマインド）

卒業予定者アンケートの項目（抜粋）

- 所属
- 入試形態
- 性別
- 各種満足度
- コンピテンシー習得度
- 留学経験
- 成績情報
- 学習活動、学生生活、就職活動の状況
- 進路状況
- 学部学科ごとの項目

- 参考：学籍番号など個人を特定できるデータは収集せず

課題　コンピテンシーデータの活用

- 各コンピテンシーを身につけたかどうかを尋ねる卒業予定者アンケートにより図のようなコンピテンシーの習得の状況がわかりました。
- 大学改革を進めるために、このデータをどのように活用することができますか。

課題　どのような学生が成長？

- 各コンピテンシーは、どのような学生が身についているのか、またどのような体験を通して身についているのか明らかにしてほしいと言われました。
- どのような項目に着目して分析をしますか。

課題　学部別データの扱い方

- 学部や学科別のコンピテンシーの習得の状況を調べました。Ａ学部が最も高くＣ学部が最も低い数値になりました。
- 大学改革を進めるために、学部や学科別のデータをどのように活用しますか。

課題　批判的な意見への対応

- コンピテンシーの習得状況の数値は、学生の主観的な意見にすぎないという意見が出されました。
- そのような意見に対してどのように対応しますか。

課題　調査の方法自体の改善

- 大学改革を進めるために、コンピテンシーの習得に関する調査や分析の方法をどのように改善していくことができるでしょうか。